

2) 結果及び考察

種苗生産結果を表4に示した。6月から9月までに6回の種苗生産を行い、合計30万尾の種

表4 種苗生産結果

		1	2	3	4	5	6
収容	採集日	6/16	7/2	7/28	6/16	8/22	9/1
	産卵日	6/16	7/3	7/29	7/30	8/22	9/2
	産卵数(万尾)	20	72	90	106	104	190
	ふ化数(万尾)	4	59	72	7	39	133
	ふ化率(%)	25	81	80	7	37	70
収容密度(千尾/t)	20	50	50	11	30	30	
取り揚げ	月日	7/7	8/2	カビの発生	8/21	9/18	10/8
	飼育日数	21	30	により全滅	22	27	38
	尾数	300	75,000		6,500	19,600	199,000
	ノープリウスからの生残率(%)	0.8	12.7		9.2	5.0	15.0
	日令	P ₉	P ₁₂ ~P ₁₈		P ₁₃	P ₁₄	P ₁₄ ~P ₂₇

苗を生産した。この中で注目してほしいのはNo.3、No.4、No.6である。

No.3はミスからポストラーバの初期にかけて、カビによる大量への死が起った。国際協力事業団の報告書にもフィリピンでのカビによる大量への死が記載されている。それによると、餌と共に体内に入ったカビの胞子が衰弱時に体内で発芽し、菌糸が増殖してへの死に至らしめ閉鎖された飼育槽内では2~3日の内に全滅する例が多いと記述されている。No.3で発生したカビも、生きている個体の体内で菌糸の増殖が見られた。対策として水換えを頻繁に行ったがその効果はなかった。カビの発生はNo.4、No.5の一部容器でも発生した。今後は、カビの発生しない飼育管理技術を確立しなければならない。

No.4は眼柄切除による産卵例である。Lin and Ting (1986)はウシエビの眼柄切除によって得た卵のふ化率の低下を指摘した。No.4でも、ふ化率は7%と悪かった。

No.6は最も成績の良かった事例である。ノープリウスからの生残率は合計では15%と低いが、これを飼育水槽別に見ると、表5に示したとおり、0.5tパンライト、4t水槽ではノープリウスからの生残率は54.7~78.7%、また単位水量当たりの生産尾数は18.6~23.6千尾/tを示した。3tと10t水槽で歩留りが悪くなったのは、ノープリウス期に高密度(14万尾/t)で飼育したものをゾエア期に分養したことと、ゾエアからミス期にかけて十分な珪藻を投与できなかったからである。